

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2008

課題番号：19520475

研究課題名（和文）

個人練習が口頭試験に与える影響

研究課題名（英文）

The impact of individual practice on oral summary test.

研究代表者

齋藤英敏 (SAITO HIDETOSHI)

茨城大学・教育学部・准教授

研究者番号：20318695

研究成果の概要：

本研究の目的は、口頭で受けた試験に練習がどれぐらい影響があるか、またキーワードリストの使用が影響を与えるかを見ることである。84名の大学生が習熟度テスト受験後、期末試験の一部である Oral Summary Test（口頭で読んだ内容をまとめるテスト）を受験し、三つの異なる課題に関して話をした。結果として、練習をしていない課題が最も低く、次に練習のみの場合で、練習をしてかつキーワードを見た場合が最も高い評価を得た。習熟度によるパフォーマンスの違いは見られなかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：①評価②オーラルテスト③英語教育

1. 研究開始当初の背景

外国語でのスピーキングパフォーマンスで事前のプランや練習が影響を与えることは明らかになっているが、それがテストにおいてどれぐらい役にたつのかはわかっていない。繰り返しの練習が言語パフォーマンススキルの向上につながるという仮説を「練習の効果仮説(practice effect hypothesis)」と呼ぶ。この仮説は Arevart & Nation, 1991; Bygate, 2001; Bygate & Samuda, 2005; Gass et al., 1999; Kawachi, 2005; Lynch & Mclean, 2000; 2001 などの研究で支持されている。しかし、テストという環境での研究はなされていない。これは一つには、テストの内容を知

って練習をしてテストを受けるということはテストの妥当性を脅かすものであるからであろう。しかし、例えばパイロットや野球などの試験を考えた場合、受験者はテスト内容を知ってそれについて練習を続け、実際のテストではパフォーマンスの到達度で評価される。つまり内容について知っておりそれに関し練習をするということは教育的配慮からいえば優先すべき事項であり、その練習がテストにどう影響を与えるかは調査する必要がある。

テスト環境での練習の影響に関する研究は存在しないが、planning (3から5分ほど計画を立てる)の影響を調査したのものがある。こ

これらの研究は (Elder et al. (2002), Elder and Iwashita (2005), Iwashita et al. (2001), Wigglesworth (2001)) いずれも大規模テストの環境で行われ、planning の影響のテストへの影響はないと結論づけている。つまり練習の効果仮説とは矛盾する結果であり、この仮説をテスト環境仮説 (testing context hypothesis) とここでは呼ぶ。Ellis(2008)はこの矛盾について環境の違いを挙げ、テスト環境の特殊性について言及している。

本研究では、この矛盾する仮説についての検証を行うが、テスト環境仮説が成立する理由は大規模テストであるということと、練習ではなく planning であったと推測し、クラスルームテストの環境で練習を行った場合のパフォーマンスの影響をみることにする。また、この研究ではキーワードリストの利用の影響も同時にみることにする。つまり、クラスルームでのテストにおいて練習、および練習をしてキーワードリストを用いた場合が、練習、キーワードリストのない場合のパフォーマンスとどの程度違うのかを調査した。

2. 研究の目的

次の仮説を設定した。(a) スピーキング試験で、練習をしてキーワードリストを用いた場合、練習をしているがキーワードを用いない場合より優れたパフォーマンスである。(b) スピーキング試験で練習をした場合は、練習しない場合より優れたパフォーマンスである。またそのさい熟達度 (proficiency) の影響も考え、その要因も考慮にいった。

またこれらを項目の観点からも見ることを行い以下の仮説を立てた(c)練習をしてキーワードリストを用いた場合、練習をしているがキーワードを用いない場合より項目の難易度は低い。(d) 練習をした場合は、練習しない場合より項目の難易度は低い。

3. 研究の方法

二回の実験を行ったが同様の方法を用いた。合計参加者数は84名の大学生である。

(1) T-SST (Standard Speaking Test) を全員が受験しその時点での一般的スピーキング能力を確定する。

(2) 一学期間の授業で5回程度 Oral Summary の練習を行いタスクに慣れる。

(3) 学期末試験の一部として、二つの課題文 (三種類のうち無作為) を与えられる。その際、次のような指示を与えられる。学習者は二つの課題文を読みキーワードを自ら選びメモをとり、そのメモを用いて一人づつ課題文を口頭で要約する。どちらを行うかはその場で指定する。要約する際はキーワードリス

トを見てよいこととする (これを行うことで、丸暗記を防ぐことができる)。また、その場で別の文を読みその要約も行う。試験は指定された場所で一人づつ行う。この際、試験で用いる課題文とともに、質問紙 (各課題文ごとの練習の回数と練習時間を自己申告するもの) を配布し、必ずそれらの情報を記入し試験時に提出するように指示する。質問紙を忘れさせないようにこの用紙の裏にキーワードを書くよう指示する。

(4) 実際の試験では、(あ) その場で一つの課題文を無作為に指定して、口頭で要約し、

(い) もう一つの課題文はキーワードを見ないで要約を行い、(う) さらに新しい課題文を読みその要約を行ってもらう。この新しい課題文を読む際には5分時間を与え (授業中に行ったときに必要とされる時間)、もし本人が必要と申し出れば数分の猶予を与える。読んだあと、課題文は見せない。またこの際、辞書使用は許可する。この順序は固定する。このことで、遂行順序による影響が考えられるが、例えば遂行順序をランダムにして (い) や (う) からはじめた場合の学習者の「驚き」によるパフォーマンスへの影響が大きいと予測されるのでそれを避ける。実際にはそれぞれの課題文の内容が異なるので、お互いの課題文は局所独立 (local independence) しているため、影響は少ないという前提にたつ。

(あ) のタスク終了後、キーワードの書かれたメモ及び質問紙は回収する。

評価は3名の評価者が評価三観点 (Language, Fluency, Content) から行った。

分析では、能力値の算出にはラッシュモデルを用いた。その際、評価者寛厳度、文章の難易度も考慮にいった。統計的検証にはANOVA (熟達度 x パフォーマンスの状況) を用いた。

4. 研究成果

結果として以下のことがわかった。図1にあるように、三つの状況でのパフォーマンスは統計的に有意に差があり、効果量は $\eta^2=0.46$ であった。つまり、練習をしてキーワードを見ながら行った場合は練習をしたがキーワードがない場合より優れたパフォーマンスであり (仮説 a を支持)、また、練習をしたがキーワードのない場合のパフォーマンスは練習のない場合より優れたパフォーマンスであった (仮説 b を支持)。それぞれのロジット (logit または log odds ratio) の差は 1.83、1.38 で練習をしてキーワードを用いた場合と練習のみの場合の差のほうが、練習のみと練習のない場合の差よりわずかに大きかった。

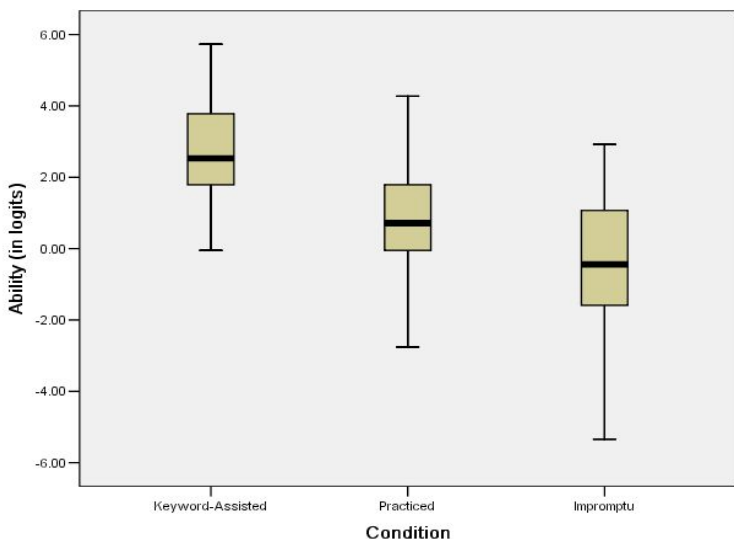


図1 キーワードを用い練習をした場合 (左)、練習のみの場合 (中央)、練習のない場合 (右) のパフォーマンスの評価の違い

しかしながら、熟達度の要因は統計的に有意ではなく、効果量も低かった。今回の研究では人数が限られているため、参加者の熟達度が3レベルしかなかった。このことは十分な分散を引き出せていないというのと同時に、同じ大学の同様の授業を受けている学生ということで、熟達度の違いが極めて少なかったと考えられる。

項目に関してはいずれもキーワードを用いて練習をした場合が最も易しく、練習をしない場合が最も難しいことがわかった (仮説c、dを支持)。また language と fluency の難易度はほとんど違いがなく、content は他の二つの項目よりやさしい項目であることがわかった (図2)。

結論としては以下の三点がわかったといえる。1)練習をしてかつキーワードを用いた場合もっとも高いスピーキングパフォーマンスが遂行でき、2)練習をしたものは、しない場合より高いパフォーマンスができる。また同様に 3)練習をしてキーワードを使用した場合の項目は最もやさしくなり、4)練習をした場合の項目は練習をしない場合の項目よりやさしいと判断される。

本研究では練習の効果仮説が支持され、テスト環境仮説は支持されなかった。本研究ではクラスルーム試験の環境でかつ長い時間の練習を行ったので当然とはいえるが、一方でこのことからテスト環境仮説は大規模テストの短時間の planning のみに成立する仮説という可能性が高まったといえる。つまりテスト環境仮説が当てはまるのは限られたコンテキストで練習の効果仮説のほうが一

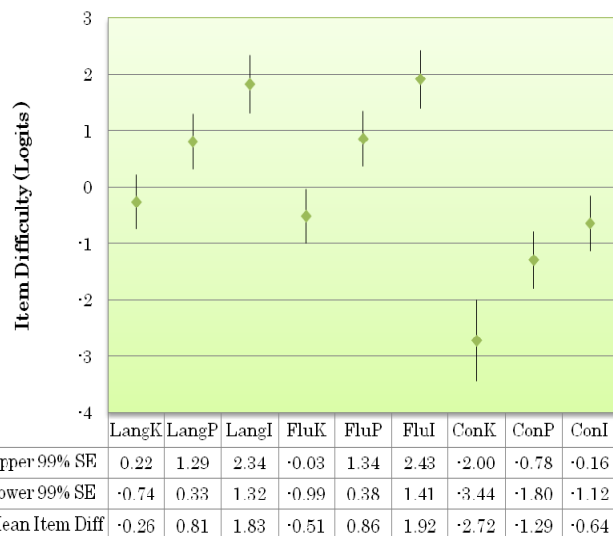


図2 項目難易度の違い、左より Language (Lang)、Fluency (Flu)、Content (Con)の項目でそれぞれキーワードを用い練習をした場合(K)、練習のみの場合(P)、練習のない場合(I)

般化可能性が高いといえる。

また、本研究から練習をすることがスピーキングテストでの高いパフォーマンスに影響をすることが明らかになった。テストに向けて練習をすることは学習者に対して有効な波及効果を導くという考え方を支持するもので、教室での指導に有益な示唆を与えると考えられる。

しかし、今回の研究では事前・事後テストを用いたデザインではないため、練習自体が練習をしなかった場合のパフォーマンスを向上させたかどうか (つまり練習が他のパフォーマンスに転移したかどうか) についてはわからなかった。練習の転移の可能性は文献では低いとされているが、これについても今後調査を行う必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① Saito, H. Comparison of keyword-assisted, practiced, and impromptu performances on oral summary tests. *茨城大学教育学部紀要 (教育科学) 58*, pp., 2009 (印刷中) (査読無).
- ② Saito, H. & Fujita, T. Peer-assessing peers' contribution to EFL group presentations. *RELC Journal, 40(2)*, pp. 149-171., 2009 (印刷中)(査読有).
- ③ Saito, H. EFL classroom peer

assessment: Training effects on rating and commenting. *Language Testing*, 25(4), pp. 553-581., 2008 (査読有).

〔学会発表〕 (計 2 件)

- ① Saito, H. The Impact of Test Practice and Keyword-Assistance in a Foreign Language Oral Summary Test. Pacific Rim Objective Measurement Symposium 2009, Hong Kong, China (PROMS 2009 HK) 2009年7月28-30日 発表予定
- ② Saito, H. Comparison of keyword-assisted, practiced, and impromptu performances on an oral summary classroom test: A pilot study. 日本言語テスト学会 第12回全国研究大会2008年9月14日(常磐大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤英敏 (SAITO HIDETOSHI)
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号 : 20318695

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者